

川端正久著

『アフリカ人の覚醒——タンガ
ニーカ民族主義の形成——』

法律文化社 2002年 xvi + 435 + xiii ページ

よし だ まさ お
吉 田 昌 夫

はじめに

本書は、東アフリカで最初（1961年）に独立を達成したタンガニーカ（ザンジバルと合邦後はタンザニア）における初期民族主義の形成の過程を、第一次資料を駆使して克明に分析した大著である。タンガニーカにおいてはアフリカの他地域にくらべて民族主義運動の成立が遅れていたとする議論が多いなかで、その根拠とされるタンガニーカ・アフリカ人民族同盟（TANU）の発足した1954年を出発点とするのではなく、20年代に形成された多様なアフリカ人組織が、結成当時は必ずしも民族主義的でなかったとしても、運動を進めるなかで民族主義的志向性を明確に示すようになったという変革の過程を重視し、それが民族的覚醒の醸成に寄与したことを証言することによって「形成の遅れ」説を乗り越え、民族運動の全容を提示したのが本書である。

本書の題名である「アフリカ人の覚醒」という言葉は、著者もいうようにバズル・デヴィッドスン（Basil Davidson）の名著 *The African Awakening*（London：Jonathan Cape, 1955）に倣ったものである。この書は当時あまり民族運動が高まりをみせていなかったベルギー領コンゴ、フランス領コンゴ、ポルトガル領アンゴラを訪れた著者が、その政治、経済、社会情勢を検討し、そこにおいてもアフリカの他地域と同じく「アフリカ人民衆の間に、今までの生き方についての、そしてまた彼らの願う今までのちがった今後の生き方への、目覚めがあらわれている」ことを明らかにした書であった。同書は日本

における現代アフリカ研究の先達西野照太郎によって『アフリカの目覚め』（岩波書店 1959年）という題の邦訳書として出版されているが、本書の著者の川端はデヴィッドスンのこの本によってアフリカ研究に導かれたと記している。

このように覚醒という言葉モチーフとして民族運動史を描く場合、まず「覚醒」とはどのようなことか、何ををもって覚醒がおこったとみるのか、ということが問題となる。それは単なる民族運動を目的とする政治組織を分析するのにとどまらず、人々、すなわちここではイギリスによって第1次世界大戦以後に委任（信託）統治されていたタンガニーカの住民たちの間に、何をきっかけとしてどのような意識の変化が起こったか、という、難しい問題に直面することになる。また何を覚醒したか、も検討すべき課題となる。

意識の覚醒という問題を重点として取り上げた他の民族運動史には、インドネシア史の碩学永積昭による『インドネシア民族意識の形成』（東京大学出版会 1980年）がある。永積はこの題名をつけることになかなか躊躇したらしく、まえがきに、「私がこれから書こうとするのはインドネシアが実際に植民地支配を脱して独立を獲得する過程よりも、むしろそれに先立つ精神的な準備過程である」と書きながら最初に考えた独立インドネシアの形成という題名を変えようとする過程で、「民族意識という言葉がほとんど毎日のようにのど元まで出ながら、私は最後まで渋っていた」と述べている。「意識」という言葉を用いる難しさをこれは如実に語っている。結局永積がこの言葉を題名に用いたのは「人間が自己の行為の正当性を主張することをやめない」存在であり、彼が書こうとしたのは、当事者たちの「インドネシア観」をたどってそれが民族運動として焦点を結ぶことに至るコミュニケーションの歴史の問題である、と考えたからであった。

前述のデヴィッドスンの『アフリカの目覚め』では、この覚醒は「変革への希望」と「従属を断ち切って平等になろうとする欲望」（序文）と説明されている。これは、アフリカ人が今まで考えが及ばなかった、自己の置かれた立場すなわち従属や貧困を

認知し、その変革に乗り出したということであろう。本書では残念ながら覚醒の意味についてあまり明示的な説明をしていない。著者は序章において、アフリカ民族主義の定義として「植民地主義に反対し、独立を目指し、自分たちの国家をもとうとするアフリカ人の思想と運動である」と述べている。本書が民族の覚醒を主題とするのであれば、このような思想を明確には持っていなかった人々の活動を包括できるようなより幅広い定義が必要とされるのではないだろうか。

本書の構成は以下のようになっている。

- 序 章 対象と視座
- 第1部 初期民族主義の形成（1920－1939年）
 - 第1章 植民地体制の確立
 - 第2章 アフリカ人組織の誕生
 - 第3章 アフリカ人協会の成立
- 第2部 初期民族主義の展開（1939－1948年）
 - 第4章 植民地主義の危機
 - 第5章 アフリカ人組織の多様化
 - 第6章 アフリカ人協会の発展
- 第3部 民族主義的運動の開始（1948－1953年）
 - 第7章 新しい植民地主義の出現
 - 第8章 アフリカ人組織の民族主義的運動の展開
 - 第9章 タンガニーカ・アフリカ人協会の成立
- 第4部 民族主義運動の出発（1953－1954年）
 - 第10章 タンガニーカ・アフリカ人民族同盟の成立
- 結 章 タンガニーカ民族主義の形成
- 補 章 文献と史料

I アフリカ人組織の誕生

永積昭の『インドネシア民族意識の形成』では、インドネシアという呼称とその地理的範囲の成立の問題が縷々述べられているが、タンガニーカという呼称と地理的範囲に関しては、アフリカにヨーロッパ諸国の帝国主義的植民地分割ではっきり線引きが行われた結果、問題は単純になっていた。イギリスのタンガニーカ支配は第1次世界大戦後にドイツ領東アフリカ植民地を受け継ぎ（現在のルワンダ、ブ

ルンジをのぞく）、国際連盟の委任統治として始まった。そのためタンガニーカ人という呼称は誰を指すかはっきりしていた。ただ住民が自らをタンガニーカ人と認識していたかどうかは別問題である。逆にタンガニーカにおける植民地統治が社会的、法律的の全面にわたりアフリカ人と非アフリカ人を区別していたことで、自らをアフリカ人と意識することは少しばかりの教育と都市居住などの環境を持つ者にとってただちに自覚されることになっていた。従っていわゆる部族的組織であっても、それを著者が述べるようにアフリカ人組織の誕生ということにくることはできるのである。ちなみに1939年におけるヨーロッパ人の数は入植者も含め6514人に過ぎず（45ページ）、後にアジア人とよばれるようになるインド人住民の数は3万人ほど（オックスフォード版 *History of East Africa III* 統計集）であった。

このタンガニーカで続々と誕生したアフリカ人組織を理解するために、本書では「組織の存在を確認し、組織の性格を判断し、部族主義および民族主義との関連で組織を分類する」方法をとっている（20ページ）。まず取り上げられているのは農民組織であるが、これは各地の住民別に構成されたのでしばしば部族組織として一括される傾向にあったが、著者は「伝統的社会のなかで発生しながら、首長勢力に代わる新しいタイプの指導者が誕生する状況において形成され」た（57ページ）とこれを位置付ける。「農民組織は……植民地政府の農業政策とりわけ換金作物の低価格と高課税に反対し、生産者農民の生活を擁護する運動体として成長した」（57ページ）という著者の指摘はまさに的を射ている。主な農民組織としては、ブコバ・ハヤ人同盟、ムワカレリ・アフリカ人耕作者協会、キリマンジャロ原住民栽培者協会（KNPA）、ンゴニ・マテンゴ協同組合、等々があげられている。なかでもこの早い時期で著者が注目したのはブコバとキリマンジャロの農民組織である。

ついで取り上げたのが商人組織の出現である。商業活動を支配してきたインド人と植民地政府の方針とに対抗して、主としてダルエスサラームで1930年代にアフリカ人商業協会が形成され、ウガンダ人の

タンガニーカ移住者エリカ・フィア (Erica Fiah) がその指導者であった。フィアにはパンアフリカの指向があったとされている。この組織は福祉という言葉を加えて協会名に加え1936年に新発足したが、その機関紙『クエトゥ』(Kwetu) は、アフリカ人に対する啓蒙活動を盛んに行い、主要都市に配布されて、その活動は後の「アフリカ人協会」に匹敵していたと著者は評価している。

次に取り上げている互助組織は出身部族や地域を単位として成立したので、民族主義という範疇で取り上げるには問題があるかも知れない。しかし植民地統治の下で生活苦に追い込まれた住民の互助活動は税金を取り立てる首長層への反抗となり、体制矛盾を敏感に感じ取ることによって成立したという歴史から、ここに含めることは肯定できる。

著者はさらに労働者組織の出現に筆を進める。タンガニーカの当時最大の輸出産物であったサイザル麻のプランテーションの労働者組織が1923年に雇用主である農園主によって設立されたが、劣悪な条件下で逃亡やサボタージュを行うにとどまっていた。アフリカ人自身が結成した労働者組織としてもっとも活発な活動を展開したのが1937年に結成されたアフリカ人労働者組合(後に港湾労働者組合)であった。都市における最大の労働者勢力で、港湾活動の麻痺はタンガニーカ経済に大きな打撃をあたえる位置にあった。彼らの「劣悪な労働環境が港湾労働者の覚醒を醸成し、港湾労働者の不満は1936年に表面化し」て(76ページ)、組合はダルエスサラーム港ではサボタージュに訴え、タンガ港ではストライキを指導した。次にタンガニーカという全体性の感覚を生み出したものとして、また一種のパンアフリカニズムの感覚を生み出したものとして著者が評価しているのが、1920年代初めに成立した「タンガニーカ地域アフリカ人公務員協会」である。会員は植民地政府の公務員であり会員の福祉向上が目的であったが、指導者たちの経歴はタンガニーカ出身者に限られず、委員7人のうちタンガニーカ生まれは2人だけであったという(79ページ)。公務員協会はアフリカ人の教育と訓練を主張したが、それはエリート特権の要求であり、独立を要求することなどはなかつ

たが、タンガニーカの統一と民族主義について主張していたことを、著者は指摘している。

II 「アフリカ人協会」の成立

本書で著者がもっとも力を入れて分析したのが、アフリカ人協会(African Association、後にタンガニーカ・アフリカ人協会:TAA)である。「はしがき」において、著者は、初期民族主義組織アフリカ人協会(AA)に焦点を合わせたと述べている。アフリカ人協会は都市の社会的組織として生まれ、当初の目的は社会福祉活動であったが、そのスローガンには「アフリカ人の利益擁護」をかかげていた。

著者のAA重視は、それがいつ創設されたかをめぐって、克明に諸説を検討していることにも表されている。諸説には1926年説から29年説までであり、もっとも多い説は29年説であるが、著者はこれに否定的であり、キャメロン英総督の書簡に基づいて説を立てたマプンダ(H. Mapunda)の分析を支持して、27年説を取っている。同協会の結成当時の会員は、「ダルエスサラームにいた教育のあるアフリカ人であり、かれらの職業は主として公務員・教員・商人であった」(100ページ)とされる。その会員にはムスリムが多かったという特徴があり、また植民地政府も、AAは社会福祉のクラブであるとしてこれを容認した。著者はこれをキャメロン総督の間接統治のひとつの方策であったと考えている(105ページ)。しかしAAはしだいに政治と無関係ではありえなくなっていく。1930年代にはその活動は停滞したが、地方に活動を広げ、ブコバ・ハヤ人同盟を取り込み、中央部のドドマやザンジバルにも活動を広げた。第2次世界大戦の勃発とともにAAの活動は活発化し、大戦後の1945年にはAAに転機が訪れた。著者によれば、「運動は部族組織を通じて農村に浸透し、支部は都市から農村へ拡大した結果、AAは都市に基礎を置く利益集団から全国的運動組織に発展した」(185ページ)のであった。

AAの支部活動でもっとも注目されるのはレーク州である。この州では、部族組織の性格を持つ「スクマ同盟」が1945年に再活性化し、その役員となっ

たマケレレ大学卒業生で教員のチャグラ (H. Chagula) やムワンザ・アフリカ人商人協同組合書記のポール・ボマニ (P. L. Bomani) ら、都市と農村を結ぶことのできる新しい世代の指導者が活動を始めた。レーク州のアフリカ人の政治活動の強みはいくつかの組織の指導者が同一人物であったことで、しかもそれぞれの違った分野で活動の成功をおさめていったことである。例えばボマニは1950年にはスクマ同盟の事務局長であったが、2年後にはレーク州の綿花生産者組合の創設者となった。アジア人の商人に対抗してアフリカ人生産者に有利な条件を勝ち取ろうとする運動は、そもそもAA（このころはTAA）が始めたものであった。こうしてTAA、スクマ同盟、綿花生産者組合がそれぞれ連携しながら政治的発言を強めていったことが、レーク州が強力な民族運動のひとつの中心になっていった理由であったが、このことは本書では明確には指摘されていない。しかしレーク州の1950年代におけるTAAのなかでの重要性は指摘されており、とくにボマニ、ボケムナンカ (I. M. Bhoke-Munanka)、カンドロ (S. A. Kandoro) の3人の指導者については正当な評価がなされている。

TAAが国際的注目をあびたのは、1940年代末から50年代初めにかけて、タンガニーカを訪問した国連使節団に、積極的に請願書を提出したことによるところが大きい。その請願書は、明らかに将来の独立を意味する「自治」の要求を含んでいた。これに対し、国連信託統治委員会の議論が行われ、TAAの存在と活動が国際的に認知されることになった。またTAAは、イギリス労働党の外郭団体ともいうべきフェビアン協会植民地局とも連携を強めたことも、本書で指摘されている。

しかし経済的な面で植民地政府に大きな打撃となったのは、何とんでも港湾労働者の覚醒と、その結果としての労働争議の高まりだった。大戦中から戦後にかけて、1939年、47年、50年と3回にわたるストライキ、とくに47年のものは、他の労働者をも含むゼネストに発展し、ほぼ50パーセントの賃上げを獲得したのである。この辺の事情は、アイリフ (J. Iliffe) の論文“A History of the Dockworkers of

Dar es Salaam.” (*Tanzania Notes and Records* 71, 1970) に詳しいが、本書でももう少しこの動きに関する説明を展開して欲しかったところである。

Ⅲ TAAからTANUへ

1954年のTAAからTANU（タンガニーカ・アフリカ人民族同盟）への移行については、本書は、著者自身が原典にあたって、その移行をもたらしたTAAの指導者の動きを分析し、またある点では、通説を批判している。この移行を大きく左右したのがニエレレの登場である。1953年4月のTAAダルエスサラーム本部の総会で彼は委員長に選出された。これには、カセラ・パントウ (J. P. Kasella Bantu)、アブドゥルワヒド・サイキ (Abdulwahid Sykes) とアリ・サイキ (Ally Kleist Sykes) 兄弟というTAAの中心で活躍してきた3人の要請があったことを、本書は明らかにしている。そして翌1954年の7月7～9日のTAA総会が、そのままTANU発足の総会となり、TAAはTANUとして発展解消し、TANU綱領が採択された。本書は、この大会の議事録と採択された綱領とを詳しく説明している。かくてタンガニーカの自治と独立にむけての闘争が、TANUの目的として明記された。この大会に出席した代表たちは、地元に戻ってTANUの目的を精力的に説明し、広範な人々に受け入れられた (353ページ) ののである。

このTANU創設に関し、ニエレレ個人のリーダーシップを強調する通説に対し、著者は必ずしも同意していない。著者の見解は、TANUの形成史において他の指導者を含めてニエレレの指導性を相対的に位置付ける必要があること、TANU結成に関与したアフリカ人民族主義者の全体像を描写する必要がある (366ページ) という点にある。この点では、評者も同感で、とくにTANU前史における運動の積み重ねの重要性は強調してもしすぎることはない。

Ⅳ 若干の細かい問題点と補章の重要性

本文中にいくつかの誤解とみられる記述があるので注意を喚起したい。まず「キリマンジャロ原住民

栽培者協会」(KNPA)はチャガ人だけの組織ではなく、パレ人も含まれていた(58ページ)。KNPAが解散させられた後設立した「キリマンジャロ原住民協同組合」(KNCU)はチャガ人の組織となったが、その違いが説明されていない。またスクマ社会におけるパナンゴマは「氏族長」とされているが、正確には首長の最高評議員である(88ページ)。TAAの委員長としてニエレレが推薦された理由のひとつとして、彼はカトリック教会関係の学校の教員であるから、植民地政府による公務員の政治活動禁止命令を回避できると考えられたと382ページにあるが、実際には彼は教員か政治活動かの選択をせまられ、教員をやめてTAA指導者の道を選んだのである。1970年代に「タンザフィリア」(Tanzaphilia)という表現があり、これはニエレレ偉人伝説のひとつの表象である、という説明が11ページにあるが、評者の知るところでは、この言葉は政治学者アリ・マズルイ(Ali Mazrui)が作り出したもので、タンザニアをすべて良くいう学者たちを皮肉って呼んだものであった。またTANU幹部のクレルー(W. A. Klerruu)の死亡には暗殺説がある(14ページ)と書かれているが、これは1971年にイリングでウジャマー協同農場をつくるため地主から土地を取り上げ

たため、衆人環視のなかで地主に撃たれたのである。

ここで、本書の最後に置かれた補章の重要性を指摘しておきたい。その内容は、前半はタンガニーカ民族主義に関する文献紹介である。評者個人がもっとも興味を持っているのは、サーダニ・カンドロ(Saadani Abdu Kandoro)による記録『独立の叫び声』(*Mwito wa Uhuru*. Dar es Salaam: Thakers Ltd., 1961)で、本書の著者自身も貴重な資料と紹介しているが、カンドロの役割はもっと評価されてよいのではないかと以前から感じていた。また本書で、第2次大戦中ビルマ戦線で戦った経験を持つ復員兵士出身の民族主義活動家に、アブドゥルワヒド・サイキ、アリ・サイキ、ドッサ・アジズ(Dossa W. A. Aziz)、ジェームズ・ムカンデ(James Mkande)など、TAAの中核をなす人々がいたことを本書で初めて知り、この関係をより深く知るため、406ページに示されたサイキ文書を可能ならぜひ見たいものだと感じさせられた。補章の後半では資料とくに政府文書の実在場所を案内しており研究者に大変親切である。

(日本福祉大学大学院教授)